主婦の立場からみた住宅安全対策

千葉県婦人防火クラブ連絡協議会
会長　竹　内　久　子

はじめに

地震・雷・火事・親父。人々が汗水流し，営々と働き築き上げた大切な家屋や財産も一瞬にして灰燼に帰し，ときには人の命をも奪う恐ろしい住宅火災！。この怖い親父様から，何としてもわが街やわが家を，自らの真白くか細い，女(おみな)の手で護ろうと意図して，私達の婦人防火クラブは，日本全国をネットワークして結成され，発足したのである。

思うに，一般家庭で火を扱う者は，大部分は主婦であり，日常，この畏怖して止まぬ親父様を取り扱う責任者として，確固とした心構えと適切な対処方法と豊かな知識が要求されるのはけだし当然であり，また必然性もあったのである。

じ来，自主防災意識の機運と高揚の下に，婦人防火クラブは当局のご尽力により，着実に強化拡大され，今日では13,570団体，会員数は235万の多きに達している。そして，火災のない平和で豊かな地域づくりに向って，常日頃意欲的な活動を展開している。

今，私はその婦人防火クラブのメンバーの一員として，ここに活動の来し方を回想し，現況と雑感を申し述べたい。先達各位のご叱責，ご鞭撻などをいただければ幸甚である。

1　活動の実践

市の自治会や町会を一単位・一団体として発足した婦人消防隊の最初の実践活動は，日本消防協会から贈呈された，軽可搬式消防ポンプ車の操作から始められた。私達隊員は消防関係者の熱心な指導の下に，油にまみれ，汗にまみれながら果敢に取り組んで行った。燃料の注入，点検，エンジンの始動方法，更に整列して号令下に操作。そして青天井を仰ぎ，グリーンベルトでは天ぷら火災のメカニズムと消火法・石油ストーブの取扱上の盲点，起震車の体験，救護者の介護等々と，小さな防災の輪は次第に各地域に拡がり，やがて県の婦人防火クラブに収斂したのである。

技術の習得と相まって，啓蒙活動やPR活動も怠らなかった。日本防火協会から贈呈された広報車で火災予防を呼びかけながら何度も市内を巡回し，また，自治省消防庁の依頼で，クラブ活動のビデオ撮りを収録した。このビデオは，私達婦人防火クラブの日常活動の様子を紹介しているもので，啓蒙運動の一助として全国の空港・JRの待合室のビデオテレビで一カ月間放映された。

2　予期せぬ出来事

（今にして思えば，その出来事は天が私に与えてくれた，最大の試練だったのであろうか……。）

私の家と緑地を挟んで，200m程離れて2階建のボーイスカウトの団舎が，100坪程の敷地内に建っている。思いがけない出来事とは，その団舎の建物火災であった。

1昨年，クリスマスを1週間後に控えての年の瀬の夕方6時半過ぎ，出火を知らされて，私は身仕度ももどかしく消火器を抱えて火災現場へ駆けつけた。現場には，火事を知って近所の人がもう数人集まっていた。鋼板製のトイレから，紅蓮の焔と真黒な煙を四方に勢いよく吹き出し，トイレ全体がさながら太い火柱の様であった。真赤な火焔は2階の外階段の踊り場に燃え移り始めている。火熱が窓ガラスを破らない数分間が勝負であると判断し，周囲の人々に声をかけた。「バケツで水を運んで下さい！　消火器があったら持って来て下さい！」　やがて，水の入ったバケツや消火器が続続と運び込まれた。と同時に，バケツの水を燃えさかるトイレに向かってかける人，人，人。私も，消火器のノズルを火に向けて噴射してみた。しかし，火勢は全く衰えるきざしはなかった。「これはもう手遅れだ！」「とても水や消火器ぐらいでは消えそうもない」「それに火の勢いが強くて，そばへ近寄れませんな」「本職に任せるしかない」人々の輪の中で，そんな会話が聞こえる。「危ないぞ！」「それ以上近寄るな！」と聞き覚えのある声が私の背後で怒鳴っていた。

防災マイクが，消防分団の出動を促しているのを上の空に聞いていた。ふとその時，トイレの上の方を見た私は，小さな窓を見つけた。火はそこからも吹き出している。私はここだ！と思い，突嗟に消火器の安全弁を抜くと，燃えさかるその小窓を目掛けて噴射した。

すると，それ迄は全く衰える様子がなかった大きな火柱は，みるみる衰えていった。それは不思議な光景であった。数十人の人垣の中から，期せずして大きな拍手が聞こえた。今迄は，真夏の様に熱く，真昼の様に明るかった周囲を，火が消えると同時に再び夕闇が包み始めた。間もなく消防車が到着した。「火を恐れぬ態度には恐れ入りました。」と，人垣の中からそんな声も聞こえた。後で聞くと，団舎の2階にはクリスマスツリー用の飾りつけや紙類が沢山あり，すぐ傍には，プロパンボンベも置かれていて，危うく大惨事になりかねなかったと，ボーイスカウトの分団長がお礼の言葉と共に私に告げた。

婦人消防隊長として初期消火に成功し，なんとかその面目を保つ事が出来たが，これもひとえに消防関係者の方々の熱心なご指導の賜物にほかならないのである。そして後日，市の消防長と，ボーイスカウト日本連盟から感謝状と記念品等で表彰された。

3　幼年，少年消防

幼児に正しい火の取り扱い方を教え，火あそびによる火災を減少させる目的の下に，婦人防火とともに幼年消防クラブも結成され発足した。

当市では，幼稚園，保育園はすべてこのクラブに加入している。出初式や大会等でちびっ子達が揃いの法被や，そろばん絞りの帯を締め，幼いながら防火の誓いを胸に秘めて，演技をし，宣誓する姿等は凜凜しく，微笑ましく，誠に頼もしい。こうしたちびっ子達の

姿に心を打たれると同時に，我が国の將来を安心して任せられると感じる今日この頃の充実ぶりである。

幼年消防クラブは100万人を突破し，出火原因の上位にあった「火あそび」による火災は大幅に減少し，全国的にみて素晴しい成果をあげていると思う。関係各位のご努力を思わずにはいられない。

だが，少年消防の実情は，幼年消防程明るくはない様である。その理由はいろいろとあろうが，私達主婦にも責任の一端はあるようだ。

しかし，その最大の理由は，義務教育の場にあるのではなかろうか。人間の火に対する考え方や，取り組み方に問題があるのではなかろうか。私は義務教育の場で，少年消防と火そのものを教育してほしいと思う。

近頃，環境教育が取り沙汰されている。環境は，地球上の生物にとって大変に大切な物だから当然であろう。同様に，火もまた必要不可欠で重大な問題であるから，「災害教育」も提唱したいのである。

人類の文明は，火とともに歩んで来た。この数百万年来の人類の友人としての火を見直す教育をする時期が来ている様に私は思う。

火打ち石の火，マッチの火，ロウソクの火，落ち葉たき火，こたつや囲炉裏の火，そして炭火や釜処の火，人間に温もりと恩恵を与えてくれた火，私達は火そのものに対して，もっと謙虚な気持ちと尊敬の念を寄せるべきであろう。正しい火の知識は正しい少年消防の道につながると信じたい。

火を疎かにしてはいけないと，太陽の火を取り込んだ。チェルノブイリの事故は人間に警告している。さもないと，火は人間の制御出来ない怪物となって人類を襲い，やがて，人類を滅亡させてしまうであろう。そうなっては遅いのである。火の正しい教育が今こそ必要であろうと思う。

4　結び

文化は人間だけに許された所産である。私達は，祖先から受け継いだ文化を正しく子孫に伝える義務と責任がある。

同時に，同世代にもっと広く伝える責務もある。ほんの小さな知識が，火災から家屋を守り人命を守る。

故に，人間の知恵の結晶としての消防文化を，正しく語り継ぎ，言い継ぎしていく必要がある。

婦人防火という奉仕活動に従事して，私は知識の習得もさることながら，教養と視野をも深められた。

ともあれ，全国各地の素晴しいご婦人達と知遇を得られた事は，私の最大の喜びなのである。婦人防火の輪がますます拡大して，明るく住み良い豊かなまちづくりの更なる発展を，当事者の一人として願う昨今である。